今週の為替相場見通し（2016年4月4日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		111.58 ～ 113.80	111.72	110.00 ～ 114.00
ユーロ	（ドル）		1.1152 ～ 1.1438	1.1384	1.1250 ～ 1.1600
（1ユーロ=）	（円）		126.44 ～ 128.22	127.17	126.50 ～ 129.00
英ポンド	（ドル）		1.4120 ～ 1.4457	1.4233	1.4000 ～ 1.4400
（1英ポンド=）	（円）	＊	158.72 ～ 162.58	158.90	157.50 ～ 162.50
豪ドル	（ドル）		0.7494 ～ 0.7723	0.7669	0.7500 ～ 0.8000
（1豪ドル=）	（円）	＊	84.88 ～ 86.71	85.69	84.00 ～ 88.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、＊印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

為替営業第二チーム　高田　裕

（1）今週の予想レンジ：　110.00　～　114.00　円

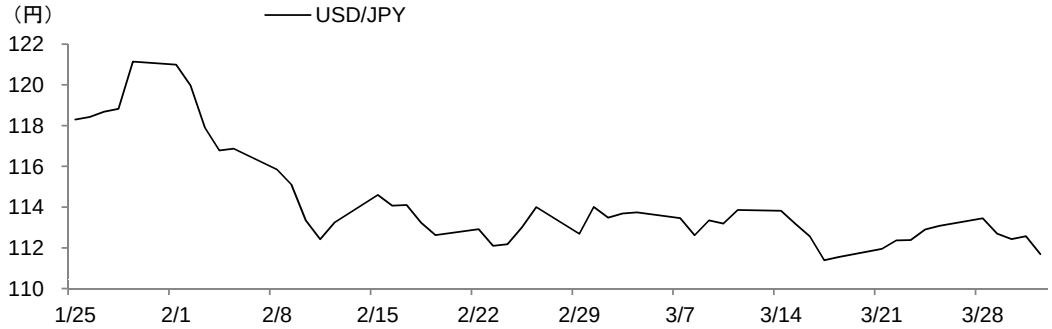
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は弱含む展開。週初28日、113円台半ばでオープンしたドル/円は、米2月コアPCEデフレーターが市場予想を下回ると、米金利低下に伴って113円台前半まで下落。29日は期末絡みのドル売りも散見される中、113 円台前半で推移した。午後に入り、安倍首相が会見を行うとの報道を受けて消費税増税の先送りなど、追加景気対策への期待が高まり、ドル/円は一時週高値となる113.80円まで上昇した。しかし、首相会見では景気対策への言及がなく、ドル/円は113 円台前半まで下落した。米国時間に入って注目されたイエレンFRB議長の講演でハト派な発言が伝わるとドル売りが強まり、ドル/円は112円台後半まで売り進められた。30日にかけてもドル売り地合いが継続する中、ドル/円は112円ちょうど付近まで下落。その後、米3 月ADP 雇用統計の市場予想を上回る結果にドル/円は112 円台後半まで値を戻すものの、徐々に売り買いが交錯する展開となり、112円台半ばを挟んで揉み合い推移に。31日は月末のドル売りやクロス円の買いに挟まれてドル/円は112 円台前半で小動きが継続も、米国時間に入ると、米3月シカゴ購買部協会景気指数が市場予想を上回ったことなどを受けドル/円は112円台半ばまで上昇。4月1日は、米3月雇用統計が良好な結果になると一時ドル/円は112円台後半まで上伸したが上値は限定的となり、その後ドル売りが加速すると111円台後半まで急落、その後も下げ止まらず週安値111.58円まで下落した。結局、そのまま安値圏で推移し111円台後半で越週している。

今週のドル/円は揉み合う相場展開を予想する。注目の米3月雇用統計は失業率が5.0％と悪化したものの、非農業部門雇用者数は21.5万人と20.0万人超え、また時間当たり賃金も上昇した。底堅い経済指標によって米国経済の力強さを再認識できたものの、FRBの利上げに対する慎重な姿勢を覆すほどの内容とはならなかったことからドル/円は111円台後半まで軟化している。足許、米金融政策動向が市場のテーマとなる中、今週は6日（水）にFOMC議事要旨（3月15～16日開催分）の発表を控える。先月29日のハト派な発言をしたイエレン議長と他のFOMCメンバーの米国景気に対する認識の相違点など注目ではあるが、相場への影響は限定的かも知れない。また、その他経済指標として4日（月）に米2月製造業新規受注、米2月耐久財受注、5日（火）に米3月非製造業景気指数が挙げられる。足許のリスクセンチメントを占う上で重要視される米経済指標ではあるが、FRBの慎重姿勢を変えるほどの影響は考えにくく、ドル/円は110円から114円の範囲での値動きを予想する。

（3）先週までの相場の推移

先週（3/28～4/1）の値動き：　安値 111.58 円　高値 113.80 円　終値 111.72 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 森谷 友一

(1)今週の予想レンジ: 1.1250 ～ 1.1600 126.50 ～ 129.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

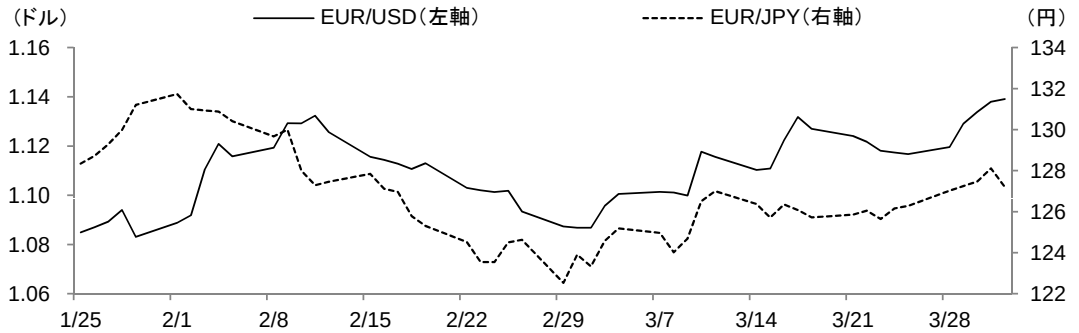
先週のユーロ相場は上昇する展開。週初28日に対ドルで1.11台後半、対円では126円台半ばでオープンした後、対ドル/対円でそれぞれ一時週安値となる1.1152/126.44円まで下落。イースター休暇でロンドン市場が休場となる中で動意に乏しい推移が続いた後、米2月コアPCEデフレーターの市場予想を下回る結果などからドル売り優勢になると対ドルで1.12台前半まで上昇した。29日はイエレンFRB議長のハト派な発言を受けてドル売りが強まると対ドルで1.12台後半まで急伸、その後も米金利が低下する動きにドル売りは継続し1.13台に乗せた。対円では本邦政府への追加景気対策への期待感などからドル/円が上昇する動きに連れて127円台半ばまで上昇。一旦126円台後半まで反落するも、イエレン議長講演後のユーロ/ドルの上昇につれて再度127円台半ばまで戻した。30日は海外時間に入りドル売りが優勢となる中、対ドルで1.13台後半まで値を伸ばしたが、期末絡みのユーロ売りが入ると1.13台前半まで反落した。31日は米新規失業保険申請件数の市場予想より弱い結果を受けてドル売りが強まると対ドルで1.14台前半、対円では一時週高値となる128.22円まで上昇した。1日は原油価格の下落やユーロ圏3月製造業PMIが市場予想を上回ったことなどからユーロ買いとなり対ドルで一時週高値となる1.1438まで上昇。その後、米3月雇用統計及び3月ISM製造業景気指数の良好な結果を受けて一旦1.13台前半まで下落するもその後反発に転じ、対ドルで1.13台後半、対円では127円台前半で越週した。

今週のユーロ相場は底堅い推移を予想する。先週はイエレン議長のハト派な発言を受けてドル売りが強まり、ユーロ/ドルは昨年10月以来となる1.14台まで上昇する局面が見られた。米利上げ観測は後退し続けており、先週末発表され相応に強い結果となった米3月雇用統計ですらドル買いには繋がらなかった。そのため、今週もドルが積極的に買われる展開にはなりづらいだろう。7日(木)には3月10日開催のECB理事会議事要旨が公表される。同理事会では市場予想を上回る追加緩和が決定されるも、その後のドラギECB総裁の会見で今後の追加利下げに対する否定的な発言が飛び出たことで、市場参加者の間では追加緩和の限界が意識されている。議事要旨の中でも今後の追加利下げについて否定的な内容が示される可能性も十分考えられ、その場合はユーロ買い材料となるだろう。莫大な経常黒字通貨ユーロが売り込まれる局面が昨年度々見られてきたのは利上げを探るFRBと追加緩和が期待されるECBの間に明確な金融政策の格差が見られたからと考えられる。ECB議事要旨で今後の追加緩和に対する可能性が示された場合やリスクオンムードになった場合にユーロ売りが強まる可能性などには注意する必要があるものの、ECBへの追加緩和期待が後退している状況下、基本的にはユーロは底堅い推移となるだろう。その他、注目材料として4 日(月)にユーロ圏2 月生産者物価指数(PPI)、5 日(火)にユーロ圏2 月小売売上高、6 日(水)に独2 月鉱工業生産が発表される予定。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/28～4/1)の値動き:

(対ドル)	安値 1.1152	高値 1.1438	終値 1.1384
(対円)	安値 126.44	高値 128.22	終値 127.17



(資料)ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　屋田祐太

(1)今週の予想レンジ:　1.4000　～ 1.4400　　157.50　～ 162.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

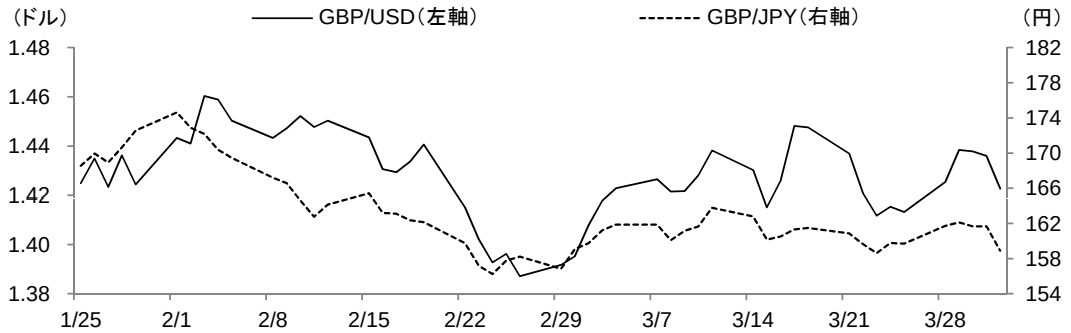
先週の英ポンド相場は、対ドル、対円ではレンジ内で推移する一方、対ユーロでは下値を切り下げた(ユーロの上昇)。週初ポンド/ドルは先々週の下落に対する自立反発的な動きから上昇してスタート。また、3月29日に行われたニューヨーク・エコノミッククラブでの講演の中でイエレンFRB議長は「米国にとっての海外、特に中国に対する懸念」と「インフレ期待の低下に対する懸念」を強調、16日のFOMC後の記者会見で示されたハト派色が改めて確認されたことで、市場はドル売り(ポンドの買い)が加速、ポンドドルは1.44台を回復した。同日、FPC(Financial Policy Committee)ミーティングも実施されており、カウンターシクリカルバッファーを2016年1月から2017年3月9日まで0.0%から0.5%へ引上げる措置が決定された(これは、対象となる金融機関等(英銀行、ビルディングソサイエティー、EU加盟国の各銀行支店)に対し自己資本比率の積増しを要求するもので、銀行の信用供与を制限するという点で政策金利引上げと同様の効果があると指摘されている)ものの、今回の引上げは昨年12月にカーニー総裁が発言していた通りの内容であったことから相場への影響は見られなかった。しかし、31日に発表された英10～12月期経常収支(予想▲212億ポンド、実績▲327億ポンド、前回▲201億ポンド)において赤字幅の大幅な拡大が示され(過去最高を更新、足もとまでは赤字改善トレンド)、内訳を見ても広範なセクターで弱さが目立ったことから、ポンド/ドルは反転し1日には1.42を割り込む水準まで低下した。またこの間、対ユーロではユーロ圏および独の3月消費者物価指数が市場予想に対し上振れたこともユーロの上昇(ポンドの下落)をサポート。ユーロ/ポンドは1日に0.80をつけ、年初来高値を更新した。

今週の英ポンド相場は、軟調ながら引き続きレンジ内での推移を見込む。ポンドは引き続き、EU残留の是非を問う国民投票(6月23日)への不透明感が心理的な重石となる可能性が高い。先週の10～12月期経常収支発表後も、ユーロ離脱派から「ユーロ圏にいる現在でも経常赤字が拡大するのだから、EU離脱による経常赤字拡大可能性への言及はEU残留の理由にならない」という意見も聞かれている。一方、対ドルにおいては29日の講演でイエレン議長がFOMCを代表するメッセージを発するのは議長一人だけであることを強調、他のメンバーが発する意見はそれぞれの考えを述べているだけで委員会の見解を必ずしも示しているわけではないということを暗に表現。イエレン議長以外のFED高官からのタカ派寄りの発言をけん制したことから、市場は簡単にはドルを買いづらい雰囲気となることは避けられないだろう。今週の英経済指標は5日(火)に3月Markitサービス業PMI、7日(木)に3月ハリファックス住宅価格、8日(金)に2月鉱工業生産および同製造業生産が予定されているが、よほど大きなサプライズとなる数字でない限り、市場への影響は限られるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週（3/28～4/1）の値動き：

(対ドル)	安値 1.4120	高値 1.4457	終値 1.4233
(対円)	安値 158.72	高値 162.58	終値 158.90



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

為替営業第二チーム 西谷 鷹

(1)今週の予想レンジ: 0.7500 ～ 0.8000 84.00 ～ 88.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

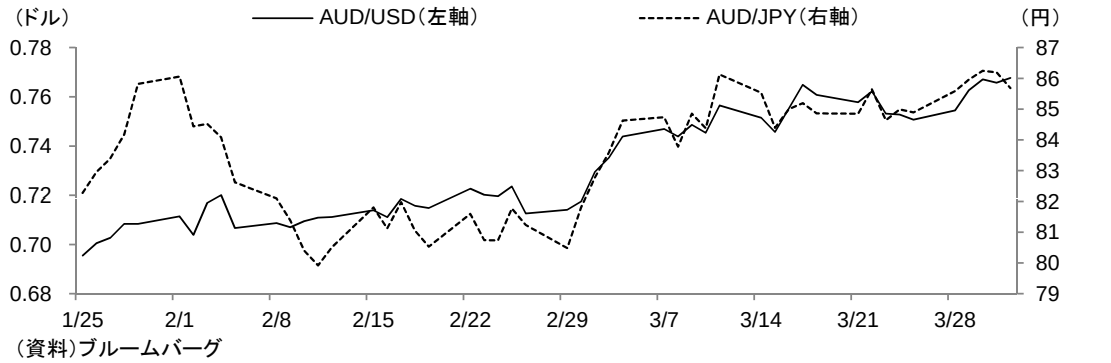
先週の豪ドル相場は上昇する展開となった。週初28日は対ドル0.75近辺、対円85円近辺でオープン。イースター休暇でシドニーや欧州市場が休場となる中、方向感に乏しい展開が続いた。翌29日はイエレンFRB議長の講演において、「利上げにおける慎重姿勢は“特に正当化される”」「必要に応じて刺激策を講じる余地はかなりある」などの発言が見られ、ハト派な内容にドル全面安の展開となると、豪ドルは0.76半ばまで上昇。30日は前日の流れを引き継ぎ、ドル売り優勢の展開が継続すると、豪ドルは一時0.77近辺まで上伸。31日は特段目立った材料のない中、本邦勢は年度末、海外勢は四半期末ということでフロー主導の値動きに終始し、豪ドルは一時週高値となる0.7723を付けるも、その後0.76台半ばまで反落した。月が変わって1日は、米3月雇用統計が発表され、非農業部門雇用者変化数が前月比+21.5万人(予想:+20.5万人)、失業率が5.0%(予想:4.9%)、平均時給が前月比+0.3%(予想:同+0.2%)と市場予想比強めの内容に、ドル買い優勢の流れとなり、豪ドルは一時0.76を割り込んだ。しかしその後は全般的にドルが売り戻される展開となると、豪ドルは再び0.76台後半まで反発。結局、豪ドル相場は対ドル0.76台後半、対円85円台後半で越週となった。

今週の豪ドル相場は上方向の値動きを予想する。先週の米3月雇用統計の結果は総じて良好な内容となったものの、先週のイエレン議長講演以降、米国の利上げ期待は大きく後退している状況。マーケット内で4月FOMCでの利上げを見込む向きは皆無であり、FRBの2回目利上げの可能性があるとすれば6月FOMCということになるだろう。しかし6月までにはまだまだ時間あり、先週の米3月雇用統計発表後のマーケットの値動きを見ても分かる通り、今回の数字を受けて積極的にドル買いを進めていくムードが高まるとは考えにくい。やはり方向感としてはドル売り優勢になると考えられ、今週についても豪ドル高ドル安の展開を想定している。豪州要因では、5日(火)に豪州準備銀行(RBA)理事会が予定されている。政策金利据え置きがマーケットのコンセンサスであり、豪経済が徐々に回復する兆しを見せている中、RBAが現状認識や見通しを前回会合時点から大きく変化させるとは考えにくい。但し、前回会合以降、豪ドル相場が大きく上昇していることには注意が必要だろう。3月はECBやニュージーランド準備銀行(RBNZ)など主要中央銀行が相次いで追加緩和策を打ち出しており、FRBにおいてもハト派色を強めている。こうした動きを背景に、相対的に豪ドル高が進みやすい地合であることから、RBAが他の中央銀行に歩調を合わせる形で、豪ドル高牽制を示す可能性はある。上述の通り、全般的にドル売りが進みやすい状況であることや、原油や鉄鉱石などのコモディティ市場に持ち直しの兆しが見られることから、豪ドル相場が大崩れする可能性は高くない。しかし、RBAがハト派寄りの姿勢を示すリスクがあることには注意が必要となる。今週の豪州の目立った経済指標としては、5日(火)に2月貿易収支の発表などが予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/28～4/1)の値動き:

(対ドル)	安値 0.7494	高値 0.7723	終値 0.7669
(対円)	安値 84.88	高値 86.71	終値 85.69



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。